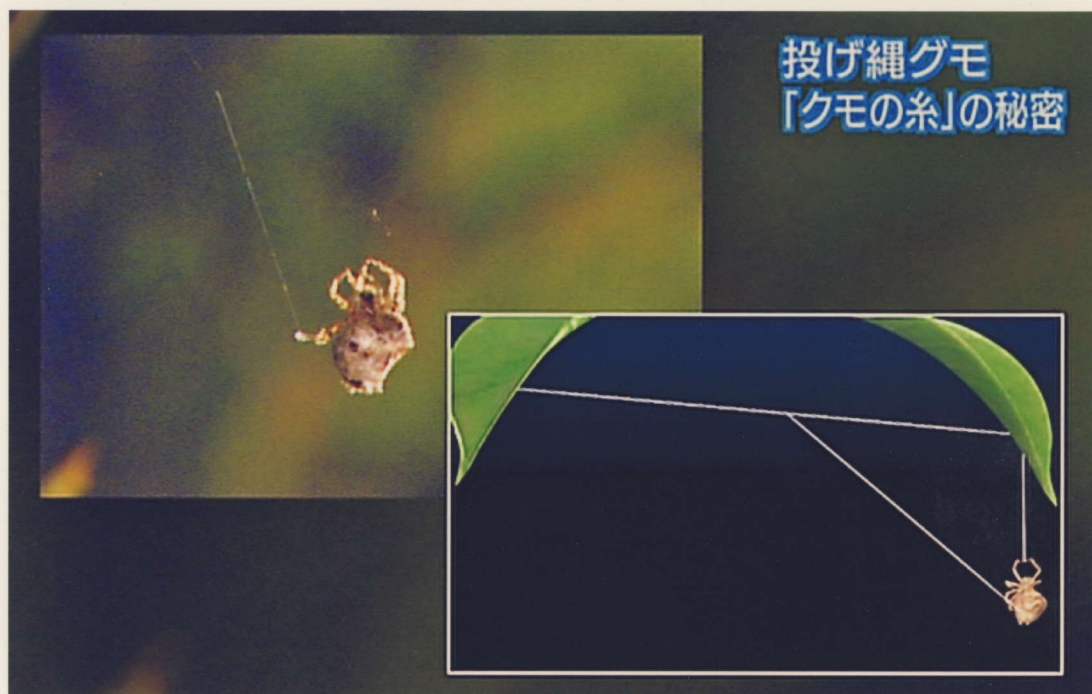
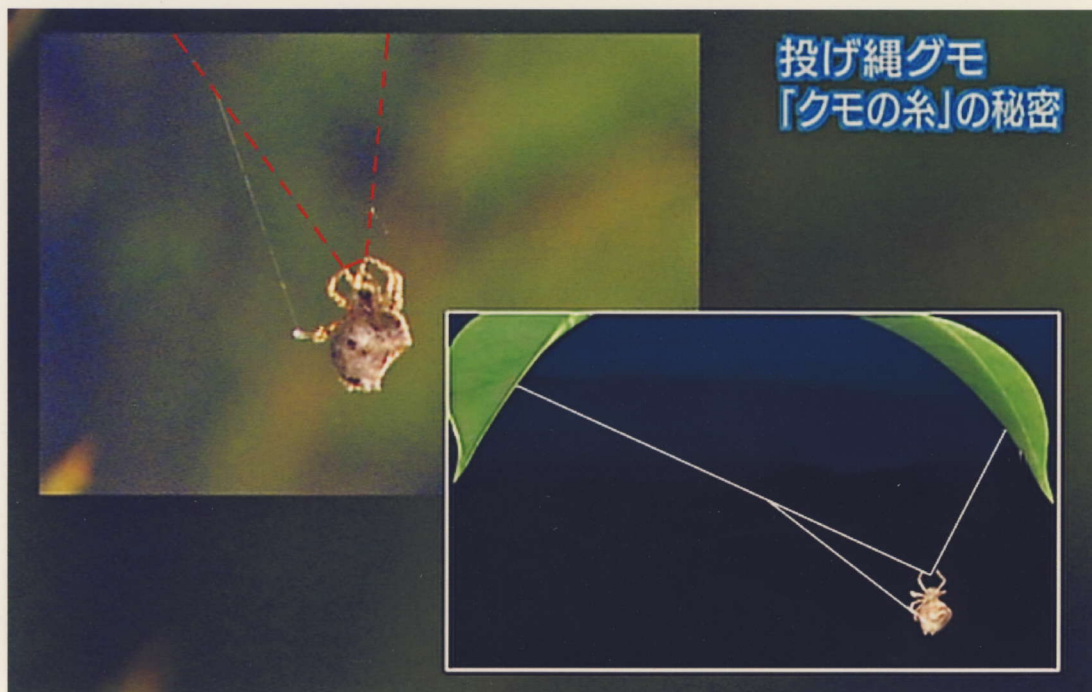


DVD 収録映像での投げ縄作成過程説明の間違い



DVD では、投げ縄作成過程の解説は上の図のように、「葉と葉の間を結ぶ横の糸（いわゆる橋糸）」、「自分がぶら下がっている糸」、「斜めの糸（いわゆる投げ縄）」の3本になっていましたが、これは誤りです。本当は、「自分のぶら下がる糸」は、独立しておりません。訂正した図を下に示しますが、クモは、たわませた「橋糸」にぶら下がりながら、「投げ縄」の粘球繰り出し作業を行います。つまり、使うのは「橋糸」「投げ縄」の2本です。



この後、橋糸の端から糸を手繰り寄せ、投げ縄を掴み、準備完了です。

トリビアの説明の補足

DVDブック 17 ページの「トリビア」のコーナーに、下のような記事が書かれています。

クモの目はいくつある？

昆虫やクモの仲間の目には「複眼」と「単眼」の2種類がある。たとえば、昆虫のトンボは、小さな目が1万個以上集まった2個の複眼と3個の単眼をもっている。複眼では飛びながら物の形や動きを見分けたり紫外線を感じたりできるが、単眼では光を感じるくらいしかで



きない。クモは8個の目をもっている。しかし、すべて単眼なのでトンボのように物が見えていない。そのかわり、クモは自分の糸や体じゅうに生えている細かい毛、体じゅうにある小さな穴などを通して、空気の震動を感じながら活動している。

カタオカハエトリの目。
正面の4個の目のほか
に、横に4個もつ

写真 新井浩司

確かに、クモの中の多くは、あまり目がよく見えず、振動に頼った生活をしている種が多いようです。ただ、クモの中にも、その単眼が非常に進化・発達しているグループもいくつかあります。それらの中で最も顕著なグループの一つと言って良いのが「ハエトリグモ科」の仲間で、振動ではなく完全に視覚に頼った生活をしています。上の『カタオカハエトリ』の写真は、撮影者の構えたカメラに反応して、こちらをジーっと凝視している瞬間です。「ハエトリグモ科」のクモは、このように顔の正面の4個（特に真中2個）の眼がとても大きく、物が良く見えます。常に辺りをキョロキョロ見回しながら行動し、何か有るとそちらに顔を向けてジーっと様子を伺います。外敵であれば、眼で相手の姿や動きを読みながら逃げますし、獲物であれば、その眼で距離を測って、ジャンプして捕らえます。また、♂♀の求愛も、トリッキーな動きで視覚に訴える「求愛ダンス」と呼ばれる行動をします。また、こういった習性を人々の遊びに利用した例として、『ネコハエトリ』の♂同士を威嚇対戦させる「ホンチ遊び」や、鷹狩りのように、部屋のハエを狩らせる事を競う「座敷鷹」などが知られています。

ちなみに「クモの眼の数」ですが、基本的には8個の種が大部分と思って良いです。ただ、6個以下の種も有り、中には洞窟等に生息する眼の無い種などもあります。